

〔資料紹介〕

創造理工学部環境資源工学科移管鉦山調査・ 実習報告書目録（1912～1948年）

佐 川 享 平

解題

2020年7月、理工学術院創造理工学部環境資源工学科より、その前身である大学部理工科採鉦学科が1910年に発足して以来、同学科の学生が行った鉦山・炭鉦実習の報告書（以下、報告書と記す）と関連資料が移管された。本巻にはこのうち、採鉦学科の発足から、1920年の大学昇格に伴う理工学部採鉦冶金学科への再編を経て、1949年に新制大学のもとで第一理工学部鉦山学科が発足するまでに作成された報告書の目録を収録する。

大学・専門学校などの高等教育機関の採鉦冶金系学科では、かつて、カリキュラムの一環として、鉦山・炭鉦での実習が行われており、実習の成果物として学校に提出された報告書（「実習報告」「実習報文」などと呼ばれる）は、現在も各学校で所蔵されている。その一種である本資料については、すでに、各大学の報告書の所蔵調査を精力的に行ってきた池上重康によって目録が公にされている⁽¹⁾。したがって、本目録には、屋上屋を架す嫌いがないではないが、移管を機に、改めて整理と目録の作成を行ったものである。なお、本巻に収録していない新制大学発足後の報告書の目録については、別途、掲載の機会を設けたい。

鉦山実習の内容と性格についての詳細は、本巻掲載の別稿（佐川享平「戦前期の早稲田大学における鉦山実習とキャリア形成」）に譲るが、実習は概ね、3年生の夏季休業期間に行われ、実習先となる鉦山・炭鉦に1ヶ月以上滞在して行われ

た。滞在中、学生は実習先の経営、技術、機械、保安、組織、労務管理等の諸側面を調査し、その成果を報告書にまとめて学科に提出した。本巻が収録した時期の報告書については、一部を除き、ハードカバーで製本され、背表紙に表題・作成年・学生の氏名が箔押しされるほか、整理番号を記したラベルが貼付されている。報告書の分量は100～200頁程度で、本文と付図が分冊されているものもある。

なお、すでに池上が指摘している通り、全ての調査報告が保管されていたわけではなく、各報告書に貼付されたラベルの通し番号や、卒業生の人数・氏名と照らしても、何らかの事情で欠落した調査報告書の存在が示唆される⁽²⁾。

今後もしその所在調査を継続する必要はあるが、大学昇格前後の端境期について、「大正9年(度)」作成の報告書を欠いている点について、及び、その前後で、一見、混乱を来しているようにも見えるラベルのナンバリングから、その数字が意味するところについて述べておきたい。

まず、一点目についてであるが、大学令に準拠する大学への昇格(1920年、学部は前身の大学部と同じく3年制)に先立ち、1919年より大学部が4月始業となり(従来は9月始業)、大学部予備門である高等予科は、1917年より1年半制から2年制に拡充されていた。したがって、1916年4月に高等予科に入学した1年半制高等予科最後の学生が、1917年9月に大学部へ入学した後、次の大学部新入生は、1917年4月に2年制高等予科に入り、2年後の1919年4月に入学した学生となった。

4月始業となって始めての、そして、大学部最後の入学生でもある、この1919年度入学生は、1年生を終えたところで大学昇格を迎えることになる。この学生たちには、旧制度に沿って、大学部2年、3年と進級して1922年3月に卒業するか、大学令に基づく大卒資格を得るため、この年度に限って設けられた別格1年、2年、3年と進級し(大学部の1年を加えて計4年間に在学することになる)、学部入学第1期生(1920年4月入学)と同時に、1923年3月に卒業するかを選択することができた⁽³⁾。

以上から、この過渡期に大学部・学部に入学生した学生の卒業年次を整理すれ

ば、次の通りである（留年や休学をした場合等を除く）。

- ・ 1917年 9 月大学部入学→1920年 7 月卒業 (1919 = 大正 8 年度卒業)
- ・ 1919年 4 月大学部入学→1922年 3 月卒業 (1921 = 大正10年度卒業)
- 1923年 3 月別格卒業 (1922 = 大正11年度卒業)
- ・ 1920年 4 月学部入学 →1923年 3 月卒業 (1922 = 大正11年度卒業)

したがって、目録に「大正 9 年度」作成の報告書がないのは、そもそも、この年度に該当する学生（3 年生）が不在であった、という事情によるものである。なお、採鉱冶金学科の在学学生・教員・卒業生らでつくる早稲田採冶会の会報は、1919年中の同科の動静を次のように伝えている。

殊に本大学の学制改革のため本年〔1919年〕三月までは一年を欠き四月には新一年生諸君を迎へたれど又七月に新卒業生を送り新三年生諸君は各鉱山各冶金工場へ実地研究の途に上りたれば九月の新学期以後は単に一年のみ存在する始末⁽⁴⁾

つまり、1918年度（1918年 9 月～1919年 3 月）は 1 年生がおらず、1919年 4 月に 2 年制高等予科をおえた学生が入学し、同年 7 月に 3 年生（1916年 9 月入学）が卒業すると、学生は1917年 9 月入学の新 3 年生と 1 年生のみとなり、かつ、その新 3 年生も、すぐに「実地研究」、すなわち実習に出掛けてしまったため、9 月末の新学期開始時に校内に残ったのは 1 年生だけだった、というわけである。

次に、この時期の報告書に貼付されたラベルについて。ラベルには、①実習報告が作成された初年度より順に、概ね年度別に付与された卒業期（回）数を示す数字（後述）、②同一年度内の通し番号、③報告書が本文と付図などで分冊されている場合の記号（A・B、①・②など）、の 3 種が記載されている。このうち、①については、作成年が「大正10年度」である報告書には、「9」で始まるラベルと、「N10」で始まるラベルが貼付されたものの 2 種類があり、「大正11年度」作成の報告書には、「O10」で始まるラベルが貼られている。

これらの報告を作成した学生の卒業年次を、卒業生の名簿が載る『早稲田大

学理工学部一覧 昭和九年度』より確認すると、「大正10年度」作成の報告書のうち、「9」ラベルの学生は、1922年3月に学部を卒業した学生、「N10」ラベルの学生は、別格に進級して1923年3月に卒業した学生、「大正11年度」作成で「O10」ラベルの学生は、1923年3月に学部を卒業した学生に、それぞれ該当することがわかる⁽⁵⁾。加えて、「N10」ラベルの報告書には、別格2年生で鉱山実習を行った旨を記したものがあり、別格に進級した学生は、大学部1年とあわせて在学3年目となる別格2年生の時に、実習を行ったとみられる。

以上をまとめると、1921年の夏季休業期間中には、1919年4月に入学した学生、つまり、大学部3年生と別格2年生の両方が鉱山実習を行い、作成された報告書の背表紙には、いずれも「大正10年度」と刻字された。一方、卒業期数を示すラベルでは、別格に進まなかった1922年3月大学部卒業生が第「9」期(回)、1923年3月卒業生が第「10」期(回)となる。しかし、第「10」期(回)に該当する学生には、別格卒業生(1919年入学)と学部卒業生(1920年入学)があり、両者を区別するために、「N」と「O」が、「10」の前に付されたとみられる⁽⁶⁾。

ところで、先述の通り、鉱山・炭鉱での実習は他の学校の採鉱冶金系学科でも行われていたが、帝国大学の場合、その報告書の標題は、概ね「実習報告」ないし「実習報文」と称されている⁽⁷⁾。その一方、早稲田大学では、戦前期はほぼ一貫して「調査報告(書)」の語が用いられ、戦時中より戦後にかけて、「実習報告(書)」へと変化している点が注目される(本資料名を「鉱山調査・実習報告書」とした所以である)。

カリキュラム上、「調査報告」から「実習報告」への名称変更は、戦後の新制大学発足とともに実施されている⁽⁸⁾。ただ、目録からもわかるように、1939年度以降、すでに「実習報告」の名称で作成・提出された報告書が登場し、むしろ多数を占めるようになっている。

『早稲田大学百年史』には、戦後直後の混乱期において、「鉱山見学」で「調査報告」の課目に代用した旨の記述があるが⁽⁹⁾、戦時下においても、繰上げ卒業や学徒動員などの影響によって鉱山実習の実施には大きな支障が生じてい

た。2年生で行う「実地演習」の成果物である「実習報告」と「調査報告」が一部で兼ねられていた可能性もあり、戦時期に用いられた「実習報告」の語は、新制大学発足後の「実習報告」とは、意味合いを異にしているかもしれない。なお、敗戦を迎える1945年の調査報告書については、今のところ所在が確認できず、鉱山実習の実施状況や報告書の作成状況は判然としない⁽¹⁰⁾。

最後に、本資料の移管は、創造理工学部環境資源工学科の関係各位の理解と協力のもとで実現の運びとなり、移管作業においても同学科山崎淳司教授、伊東克己氏（理工センター技術部教育研究支援課職員）の助力を得た。ここに付記して、謝意を表する次第である。

なお、本資料の整理作業は、山西麗瑛（大学史資料センター職員）が行った。

凡例：

- ・ 資料名・作成者・作成年の各記載事項は、原則として報告書の背表紙より採録し、明らかな誤記・誤植は修正した。
- ・ 人名を除き、旧字は新字に（萬→万、彌→弥、國→国、鑛→鉱など）、異体字は正体字に（礪→砥、烟→煙など）、それぞれ改めた。

番号	ラベル番号			資 料 名
1	1	1	A	尾去沢鉾山調査報告
2	1	1	B	尾去沢鉾山調査報告附図
3	1	2	A	遊泉寺銅山調査報告
4	1	2	B	遊泉寺銅山調査報告附図
5	1	3		夕張炭砒調査報告
6	1	4		小野田炭砒調査報告
7	1	5	A	小坂鉾山調査報告
8	1	5	B	小坂銅山調査報告附図
9	1	6	A	入山炭砒調査報告
10	1	7	A	二瀬炭砒調査報告
11	1	7	B	二瀬炭砒調査報告附図
12	1	8	A	撫順炭砒調査報告
13	1	8	B	撫順炭砒調査報告附図
14	1	9		日立鉾山調査報告書
15	1	10	A	尾小屋鉾山調査報告
16	1	10	B	尾小屋鉾山調査報告附図
17	1	11		佐渡鉾山調査報告
18	1	12		茨城無煙炭砒調査報告
19	2	1	A	別子鉾山調査報告書 第一編
20	2	1	B	別子鉾山調査報告書 第二編
21	2	2		阿仁鉾山調査報告書
22	2	3		三池炭砒万田坑調査報告書
23	2	4		幾春別鉾調査報告書
24	2	5		不老倉鉾山調査報告書
25	2	6	A	荒川鉾山調査報告書 其一
26	2	6	B	荒川鉾山調査報告書 其二
27	2	7		椿鉾山調査報告書
28	2	8	A	撫順炭砒調査報告書
29	2	8	B	撫順炭砒調査報告書附図
30	2	9	A	夕張炭砒調査報告書
31	2	9	B	夕張炭砒調査報告書附図
32	3	1		青森県安部城鉾山調査報告書
33	3	3		石川県尾小屋銅山撰鉾場調査報告書
34	3	4		内郷炭砒調査報告書
35	3	5		足尾銅山通道坑調査報告書
36	3	6	A	日本石油株式会社西山油田宮川出張所鎌田鉾場調査報告書
37	3	6	B	柏崎製油所調査報告書

作 成 年	(西暦)	作成者名	所在地	経営企業（鉱業権者）
大正元年	1912	遠山四郎	秋田	三菱合資
大正元年	1912	遠山四郎	—	—
大正元年	1912	加藤榮太郎	石川	竹内鉱業
大正元年	1912	加藤榮太郎	—	—
大正元年	1912	横山利三郎	北海道	北海道炭砒汽船
大正元年	1912	高見澤一介	福島	磐城炭砒
大正元年	1912	中泉新	秋田	藤田組
大正元年	1912	中泉新	—	—
大正元年	1912	野村堅	福島	入山採炭
大正元年	1912	黒瀬白	福岡	官営製鉄所
大正元年	1912	黒瀬白	—	—
大正元年	1912	友井信義	満州	南満州鉄道
大正元年	1912	友井信義	—	—
大正元年	1912	木下静馬	茨城	久原鉱業
大正元年	1912	正野豊	石川	横山鉱業部
大正元年	1912	正野豊	—	—
大正元年	1912	井上哲男	新潟	三菱合資
大正元年	1912	小野重三郎	茨城	茨城無煙炭砒
大正2年度	1913	小池正雄	愛媛	住友合資
大正2年度	1913	小池正雄	—	—
大正2年度	1913	宗方哲太郎	秋田	古河合名
大正2年度	1913	久保木信次	福岡	三井鉱山
大正2年度	1913	山邊一郎	北海道	北海道炭砒汽船
大正2年度	1913	東與三二	秋田	古河合名
大正2年度	1913	佐々木芳之助	秋田	三菱合資
大正2年度	1913	佐々木芳之助	—	—
大正2年度	1913	重井平四郎	秋田	武田恭作（大日本鉱業）
大正2年度	1913	星野惺	満州	南満州鉄道
大正2年度	1913	星野惺	—	—
大正2年度	1913	湯浅義雄	北海道	北海道炭砒汽船
大正2年度	1913	湯浅義雄	—	—
大正3年度	1914	花田英夫	青森	田中鉱業
大正3年度	1914	山崎忠純	石川	横山鉱業部
大正3年度	1914	安井眞十郎	福島	磐城炭砒
大正3年度	1914	新井菊壽	栃木	古河合名
大正3年度	1914	佐藤卓二	新潟	日本石油
大正3年度	1914	佐藤卓二	新潟	日本石油

番号	ラベル番号			資 料 名
38	3	7		久根銅山調査報告書
39	3	8	A	撫順炭砒調査報告書
40	3	8	B	撫順炭砒調査報告書附図
41	3	9		大蔵鉾山調査報告書
42	3	10		台湾金瓜石鉾山報告書
43	3	11		日立鉾山調査報告書
44	3	12		生野鉾山調査報告書
45	4	2		帯江鉾山調査報告書
46	4	3		大之浦炭砒菅牟田第五坑調査報告書
47	4	4		高田鉾山調査報告書
48	4	5	A	忠隈炭坑調査報告書
49	4	5	B	忠隈炭砒調査報告書附図
50	4	6		仙人鉾山調査報告書
51	4	7		山野炭砒鴨生坑調査報告書
52	4	8		支那大冶鉄山調査報告書
53	4	9		八菱鉾山調査報告書
54	4	10		山々野金山調査報告書
55	4	11	A	大森鉾山調査報告書 第一巻
56	4	11	B	大森鉾山調査報告書 第二巻
57	4	11	C	大森鉾山調査報告書附図
58	4	12		吉岡鉾山調査報告書
59	4	13		南満洲撫順炭砒楊柏堡坑充填採掘法報告
60	4	14		峰之沢鉾山調査報告書
61	4	15		花岡鉾山調査報告書
62	4	17		芳谷炭坑調査報告書
63	5	1		面谷鉾山調査報告書
64	5	2	A	大荒沢鉾山調査報告書
65	5	2	B	大荒沢鉾山調査報告書附図
66	5	3		松岡鉾山調査報告書
67	5	4		串木野鉾山調査報告書
68	5	5		安部城鉾山調査報告書
69	5	6		尾小屋鉾山調査報告書
70	5	7		遊泉寺銅山調査報告書
71	5	8		本溪湖煤鉄有限公司調査報告書
72	5	9		柞嶋炭砒調査報告書
73	5	10		釜石鉾山調査報告書
74	5	11		尾去沢鉾山調査報告書

作 成 年	(西曆)	作成者名	所在地	経営企業 (鉱業権者)
大正3年度	1914	佐野菊次郎	静岡	古河合名
大正3年度	1914	角逸三	満州	南満州鉄道
大正3年度	1914	角逸三	—	—
大正3年度	1914	朝日貫一	山形	横山鉱業部
大正3年度	1914	細梅武雄	台湾	田中組
大正3年度	1914	五十嵐規矩也	茨城	久原鉱業
大正3年度	1914	宋慶鼎	兵庫	三菱合資
大正4年度	1915	西村元三郎	岡山	藤田組
大正4年度	1915	富永貫一	福岡	貝島鉱業
大正4年度	1915	立花末次郎	宮城	高田商会
大正4年度	1915	塚本武一	福岡	住友合資
大正4年度	1915	塚本武一	—	—
大正4年度	1915	中村節雄	岩手	仙人製鉄所
大正4年度	1915	内海東男	福岡	三井鉱山
大正4年度	1915	三浦榮次郎	中国	漢冶萍公司
大正4年度	1915	鹽澤正一	福島	八菱鉱山合資
大正4年度	1915	森文彦	鹿児島	島津家
大正4年度	1915	杉野信三	島根	藤田組
大正4年度	1915	杉野信三	—	—
大正4年度	1915	杉野信三	—	—
大正4年度	1915	片岡松三郎	岡山	三菱合資
大正4年度	1915	立川益藏	満州	南満州鉄道
大正4年度	1915	中野争鹿	静岡	久原鉱業
大正4年度	1915	高山學	秋田	藤田組
大正4年度	1915	牛島隆	佐賀	三菱合資
大正5年度	1916	石井東作	福井	三菱合資
大正5年度	1916	石郷岡英之助	岩手	藤田組
大正5年度	1916	石郷岡英之助	—	—
大正5年度	1916	蕤澤文雄	秋田	藤田組
大正5年度	1916	二宮郁之介	鹿児島	三井鉱山
大正5年度	1916	吉田孝信	青森	田中鉱業
大正5年度	1916	鳴門孝夫	石川	横山鉱業部
大正5年度	1916	中島小四郎	石川	竹内鉱業
大正5年度	1916	梅津七蔵	満州	本溪湖煤鉄公司
大正5年度	1916	八頭司佐六	佐賀	高取鉱業
大正5年度	1916	佐藤政右衛門	岩手	田中鉱山
大正5年度	1916	坂田禾磨	秋田	三菱合資

番号	ラベル番号		資 料 名
75	5	13	足尾銅山調査報告書
76	5	14	三井田川炭鉱伊田堅坑調査報告書
77	5	15	永松鉱山調査報告書
78	5	16	新入炭硯調査報告書
79	5	17	方城炭硯調査報告書
80	5	18	日立鉱山調査報告書
81	6	2	高取鉱山附日三市鉱山選鉱場調査報告書
82	6	3	高田鉱山調査報告書
83	6	4	小坂鉱山調査報告書
84	6	5	大瀬鉱山調査報告書
85	6	6	水沢鉱山調査報告書
86	6	7	加納鉱山調査報告書
87	6	8	久根鉱山調査報告書
88	6	9	持倉鉱山調査報告書
89	6	10	A 鯉田炭硯調査報告書
90	6	10	B 鯉田炭硯調査報告書附図
91	6	11	撫順炭硯調査報告書
92	6	12	木戸ヶ沢鉱山調査報告書
93	6	13	本溪湖炭硯調査報告書
94	6	14	雲山金坑調査報告書
95	6	15	吉乃及八盛鉱山調査報告書
96	6	16	花岡鉱山調査報告書
97	6	17	綱取鉱山調査報告書
98	6	18	佐渡鉱山調査報告書
99	6	19	A 別子鉱山調査報告書
100	6	19	B 別子鉱山調査報告書附図
101	7	1	A 生野鉱山調査報告書
102	7	1	B 生野鉱山調査報告書附図
103	7	2	三井田川大蔵坑調査報告書
104	7	4	崎戸炭硯調査報告書
105	7	5	荒川鉱山調査報告書
106	7	6	西沢金山調査報告書
107	7	7	阿仁鉱山調査報告書
108	7	8	不老倉鉱山調査報告書
109	7	9	尾去沢鉱山調査報告書
110	7	10	東山鉱山調査報告書
111	7	11	松嶋炭硯調査報告書

作 成 年	(西暦)	作成者名	所在地	経営企業（鉱業権者）
大正5年度	1916	木脇博	栃木	古河合名
大正5年度	1916	西岡哲夫	福岡	三井鉱山
大正5年度	1916	小幡良	山形	古河合名
大正5年度	1916	畠訂	福岡	三菱合資
大正5年度	1916	平井文三	福岡	三菱合資
大正5年度	1916	猪又勉三	茨城	久原鉱業
大正6年度	1917	橋本奥雄	茨城	三菱合資
大正6年度	1917	梁上椿	宮城	高田商会
大正6年度	1917	大川英三	秋田	藤田組
大正6年度	1917	小田清	愛媛	久原鉱業
大正6年度	1917	小谷重三	岩手	古河鉱業
大正6年度	1917	高橋鐵造	福島	加納鉱山
大正6年度	1917	宗田惣一	静岡	古河鉱業
大正6年度	1917	祖父江周三	新潟	小出淳太
大正6年度	1917	筒井盤雄	福岡	三菱合資
大正6年度	1917	筒井盤雄	—	—
大正6年度	1917	梅崎覚一	満州	南満州鉄道
大正6年度	1917	工藤啓策	栃木	久原鉱業
大正6年度	1917	候桂林	満州	本溪湖煤鉄公司
大正6年度	1917	小南不二男	朝鮮	東洋合同採鉱
大正6年度	1917	相坂一郎	秋田	大日本鉱業
大正6年度	1917	佐原武雄	秋田	藤田組
大正6年度	1917	矢部直敬	岩手	三菱合資
大正6年度	1917	石井忠治	新潟	三菱合資
大正6年度	1917	早速勉	愛媛	住友合資
大正6年度	1917	早速勉	—	—
大正7年度	1918	石黒英一	兵庫	三菱鉱業
大正7年度	1918	石黒英一	—	—
大正7年度	1918	林宗徳	福岡	三井鉱山
大正7年度	1918	林貢	長崎	九州炭硯汽船
大正7年度	1918	丹生谷俊	秋田	三菱鉱業
大正7年度	1918	土井彦太郎	栃木	西沢金山
大正7年度	1918	川島康一	秋田	古河鉱業
大正7年度	1918	金井節二	秋田	古河鉱業
大正7年度	1918	春日井逸郎	秋田	三菱鉱業
大正7年度	1918	吉田二雄	徳島	久原鉱業
大正7年度	1918	中島素	長崎	松嶋炭硯

番号	ラベル番号		資 料 名
112	7	13	玖珂鉾山・喜和田鉾山調査報告書
113	7	14	大正鉾山調査報告書
114	7	15	金田炭硯調査報告書
115	7	17	尾小屋鉾山調査報告書
116	7	18	相知炭硯調査報告書
117	7	19	峰地炭硯調査報告書
118	7	22	銅路炭硯調査報告書
119	8	3	三井本洞炭坑調査報告書
120	8	4	金瓜石鉾山調査報告書
121	8	6	足尾銅山通洞選鉾場調査報告書
122	8	7	三池炭硯七浦坑調査報告書
123	8	9	勝立坑調査報告書
124	8	10	豊羽鉾山調査報告書
125	8	11	永松鉾山調査報告書
126	8	12	大嶋鉾山調査報告書
127	8	14	茨城無煙炭坑第二坑調査報告書
128	8	15	古河第二目尾炭硯調査報告書
129	8	16	河津鉾山調査報告書
130	8	18	三井万田坑調査報告書
131	8	21	富来鉾山調査報告書
132	8	23	三井山野炭硯鴨生坑調査報告書
133	8	24	竹野鉾山調査報告書
134	8	26	山ヶ野金山調査報告書
135	8	27	稷山金硯浚渫採金法調査報告書
136	8	28	明治第四坑調査報告書
137	8	29	三好高尾第一坑調査報告書
138	9	1	磐城炭硯高坂坑調査報告書
139	9	2	日立鉾山製錬所調査報告書
140	9	3	三井田川鉾業所第一坑調査報告書
141	9	5	入山採炭第五坑調査報告書
142	9	6	磐城炭硯町田炭坑調査報告書
143	9	8	撫順炭硯大山採炭所千金寨坑調査報告書
144	9	9	三井田川鉾業所第三坑報告書
145	9	10	茨城無煙炭硯第二硯調査報告書
146	9	11	A 撫順炭硯楊柏堡坑調査報告書
147	9	11	B 撫順炭硯楊柏堡坑調査報告書附図
148	9	12	花岡鉾山調査報告書

作 成 年	(西曆)	作成者名	所在地	経営企業（鉱業権者）
大正7年度	1918	小林鴻三	山口	田中鉱業・栗村鉱業
大正7年度	1918	河野俊雄	青森	大正鉱山
大正7年度	1918	黄延勲	福岡	三菱鉱業
大正7年度	1918	酒井清一郎	石川	横山鉱業部
大正7年度	1918	宮崎安間	佐賀	三菱鉱業
大正7年度	1918	重藤武者勝	福岡	藏内鉱業
大正7年度	1918	松永六治	北海道	三井鉱山
大正8年度	1919	星見操	福岡	三井鉱山
大正8年度	1919	原田光一	台湾	田中組
大正8年度	1919	本多明道	栃木	古河鉱業
大正8年度	1919	折目薫	福岡	三井鉱山
大正8年度	1919	小野勝浄	福岡	三井鉱山
大正8年度	1919	川原政一	北海道	久原鉱業
大正8年度	1919	笠原修	山形	古河鉱業
大正8年度	1919	横幕直秀	山形	古河鉱業
大正8年度	1919	宇田川光七	茨城	茨城無煙炭鉱
大正8年度	1919	安原成吾	福岡	古河鉱業
大正8年度	1919	増尾精一	静岡	久原鉱業
大正8年度	1919	福永龜吉	福岡	三井鉱山
大正8年度	1919	板津直毅	石川	三菱鉱業
大正8年度	1919	吉瀬浩	福岡	三井鉱山
大正8年度	1919	小助川省三	兵庫	久原鉱業
大正8年度	1919	原秀一	鹿児島	島津家
大正8年度	1919	神田喜代藏	朝鮮	稷山金坑
大正8年度	1919	川谷淳一郎	福岡	明治鉱業
大正8年度	1919	島田等	福岡	三好徳松
大正10年度	1921	磯貞夫	福島	磐城炭砒
大正10年度	1921	長谷川朋藏	茨城	久原鉱業
大正10年度	1921	戸田知	福岡	三井鉱山
大正10年度	1921	山内東陸	福島	入山採炭
大正10年度	1921	高月環（翠葉）	福島	磐城炭砒
大正10年度	1921	本村岩記	満州	南満州鉄道
大正10年度	1921	平野三郎	福岡	三井鉱山
大正10年度	1921	大川正禮	茨城	茨城無煙炭鉱
大正10年度	1921	三浦茂	満州	南満州鉄道
大正10年度	1921	三浦茂	—	—
大正10年度	1921	橘高黄一	秋田	藤田鉱業

番号	ラベル番号		資 料 名
149	9	13	足尾鉾山調査報告書
150	9	14	足尾鉾山調査報告書
151	N10	1	A 台湾金瓜石鉾山並瑞芳金山調査報告書
152	N10	1	B 台湾金瓜石鉾山並瑞芳金山調査報告書附図
153	N10	3	A 撫順炭砒老虎台採炭所調査報告書
154	N10	3	B 撫順炭砒老虎台採炭所調査報告書附図
155	N10	4	大日本炭砒湯本砒業所調査報告書
156	N10	5	串木野鉾山調査報告書
157	N10	6	三池炭砒宮浦坑調査報告書
158	N10	8	A 撫順炭砒大山坑調査報告書
159	N10	8	B 撫順炭砒大山坑調査報告書附図
160	N10	9	日立鉾山調査報告書
161	N10	10	大辻炭砒調査報告書
162	N10	11	磐城炭砒小野田炭砒調査報告書
163	N10	12	佐渡鉾山調査報告書
164	N10	13	杵嶋炭坑調査報告書
165	N10	14	A 鯉田炭坑第五坑調査報告書
166	N10	14	B 鯉田炭坑第五坑調査報告書附図
167	O10	2	道川油田調査報告書
168	O10	3	北海道夕張炭砒天龍坑調査報告書
169	O10	4	撫順炭砒万達屋坑調査報告書
170	O10	5	新夕張炭砒調査報告書
171	O10	6	鯛生金山調査報告書
172	O10	7	北海道万字炭砒調査報告書
173	O10	8	撫順炭砒新屯坑調査報告書
174	O10	9	幾春別炭砒調査報告書
175	O10	10	三井串木野金山西山坑調査報告書
176	O10	11	北海道夕張炭坑調査報告書
177	O10	14	B 大夕張炭砒調査報告書
178	O10	15	亀山炭砒調査報告書
179	O10	16	撫順龍鳳坑土砂充填作業調査報告書
180	O10	22	弥生鉾業所調査報告書
181	O10	23	豊川油田ニ於ケル油井掘鑿法調査報告書
182	O10	24	赤池鉾業所第二坑調査報告書
183	O10	25	柵原鉾山調査報告書
184	O10	26	幌内砒調査報告書
185	O10	27	若菜邊鉾南坑調査報告書

作 成 年	(西暦)	作成者名	所在地	経営企業（鉱業権者）
大正10年度	1921	ウーカー	栃木	古河鉱業
大正10年度	1921	サンニヨン	栃木	古河鉱業
大正10年度	1921	伊賀崎基助	台湾	田中鉱山・藤田鉱業
大正10年度	1921	伊賀崎基助	—	—
大正10年度	1921	今井史郎	満州	南満州鉄道
大正10年度	1921	今井史郎	—	—
大正10年度	1921	長谷川榮治郎	福島	大日本炭鉱
大正10年度	1921	沼田辰治	鹿児島	三井鉱山
大正10年度	1921	落合光三	福岡	三井鉱山
大正10年度	1921	加藤良治	満州	南満州鉄道
大正10年度	1921	加藤良治	—	—
大正10年度	1921	福島武雄	茨城	久原鉱業
大正10年度	1921	城戸日出夫	福岡	貝島鉱業
大正10年度	1921	喜多覺次	福島	磐城炭硯
大正10年度	1921	菊地藤造	新潟	三菱鉱業
大正10年度	1921	毛利次	佐賀	高取鉱業
大正10年度	1921	杉本哲五郎	福岡	三菱鉱業
大正10年度	1921	杉本哲五郎	—	—
大正11年	1922	今井喜三郎	秋田	日本石油
大正11年度	1922	仙谷千和喜	北海道	北海道炭硯汽船
大正11年	1922	任統彬	満州	南満州鉄道
大正11年	1922	星山竹三	北海道	石狩石炭
大正11年	1922	小原有海生	大分	鯛生金山鉱業
大正11年度	1922	小笠原千代治	北海道	北海道炭硯汽船
大正11年	1922	甘露寺順孝	満州	南満州鉄道
大正11年	1922	田村榮市	北海道	北海道炭硯汽船
大正11年	1922	田代哲夫	鹿児島	三井鉱山
大正11年度	1922	立花多三郎	北海道	北海道炭硯汽船
大正11年	1922	中村範一	北海道	三菱鉱業
大正11年	1922	中島徳太郎	福岡	山下石炭
大正11年	1922	小池幸作	満州	南満州鉄道
大正11年	1922	前村正	北海道	東邦炭鉱
大正11年	1922	渥美武六	新潟	中外アスファルト
大正11年	1922	相浦英六	福岡	明治鉱業
大正11年	1922	岸本勝利	岡山	藤田鉱業
大正11年	1922	皆川治平	北海道	北海道炭硯汽船
大正11年	1922	渋谷八造	北海道	北海道炭硯汽船

番号	ラベル番号			資 料 名
186	O10	28	A	高島鉱業所二子坑調査報告書
187	O10	28	B	高島鉱業所二子坑調査報告書附図
188	O10	30		相知炭鉱調査報告書
189	N11	1		三好炭坑調査報告書
190	N11	2		秋田県雄勝郡吉乃鉱山調査報告書
191	N11	3		相知炭坑調査報告書
192	N11	4		中島鉱業株式会社第二坑調査報告書
193	N11	5		古河好間鉱業所調査報告書
194	N11	6		磐城炭鉱株式会社高坂坑調査報告書
195	N11	7		高田炭坑調査報告書
196	N11	8		豊国炭坑第三坑調査報告書
197	N11	9		生野鉱山調査報告書
198	N11	10		方城炭鉱調査報告書
199	N11	11		撫順炭鉱古城子露天堀調査報告書
200	N11	12		煙台炭坑調査報告書
201	N11	13		本溪湖炭坑調査報告書
202	N11	14		坂炭鉱株式会社上歌志内炭鉱調査報告書
203	N11	15		土畑鉱山調査報告書
204	N11	16		崎戸鉱業所福浦坑調査報告書
205	N11	17		製鉄所二瀬出張所中央坑本鉱調査報告書
206	N11	18		西沖之山炭鉱調査報告書
207	N11	19		三菱上山田炭坑調査報告書
208	N11	20		鯉田炭坑調査報告書
209	N11	21		撫順炭鉱新屯坑調査報告書
210	N11	22		尾去沢鉱山調査報告書
211	N11	23		磐城炭鉱株式会社町田堅坑内二卸及廣畑調査報告書
212	N11	25		入山採炭株式会社第五坑調査報告書
213	N11	26		撫順炭鉱龍鳳坑調査報告書
214	N11	28		佐渡鉱山製錬所調査報告書
215	N11	31		串木野鉱山製錬所調査報告書
216	N11	34		磐城炭鉱株式会社綴坑調査報告書
217	N12	1		砂川炭鉱調査報告書
218	N12	2		沖ノ山炭坑調査報告書
219	N12	3		唐津炭田岩屋炭坑調査報告書
220	N12	4		三池鉱業所宮ノ浦坑調査報告書
221	N12	5		日本石油豊川鉱業所調査報告書
222	N12	9		北海道炭鉱汽船株式会社登川炭鉱調査報告書

作 成 年	(西暦)	作成者名	所在地	経営企業（鉱業権者）
大正11年	1922	島房一	長崎	三菱鉱業
大正11年	1922	島房一	—	—
大正11年	1922	辛島吉之助	佐賀	三菱鉱業
1923	1923	一寶虎彦	福岡	三好徳松
1923	1923	市島吉之助	秋田	大日本鉱業
1923	1923	馬場林	佐賀	三菱鉱業
1923	1923	西川武夫	福岡	中島鉱業
1923	1923	大川健次郎	福島	古河鉱業
1923	1923	大野恭次郎	福島	磐城炭砒
1923	1923	渡邊四三	福岡	明治鉱業
1923	1923	金坂越二	福岡	明治鉱業
1923	1923	笠井志郎	兵庫	三菱鉱業
1923	1923	田崎儀四郎	福岡	三菱鉱業
1923	1923	堤秀雄	満州	南満州鉄道
1923	1923	永野義齋	満州	南満州鉄道
1923	1923	隈上三蔵	満州	本溪湖煤鉄公司
1923	1923	松尾経雄	北海道	坂炭砒
1923	1923	小檜山元	岩手	田中鉱業
1923	1923	栗野良平	長崎	九州炭砒汽船
1923	1923	木村利夫	福岡	官営製鉄所
1923	1923	岸上順一	山口	沖ノ山炭鉱
1923	1923	弓削田徳次郎	福岡	三菱鉱業
1923	1923	宮田稔	福岡	三菱鉱業
1923	1923	清水年夫	満州	南満州鉄道
1923	1923	仙石知止	秋田	三菱鉱業
1923	1923	菅原清行	福島	磐城炭砒
1923	1923	一木昇吾	福島	入山採炭
1923	1923	宮口剛	満州	南満州鉄道
1923	1923	西田博	新潟	三菱鉱業
1923	1923	丸衛治	鹿児島	三井鉱山
1923	1923	成田與吉	福島	磐城炭砒
大正13年度	1924	伊藤弘	北海道	三井鉱山
大正13年度	1924	一柳眞雄	山口	沖ノ山炭鉱
大正13年度	1924	石原茂	佐賀	貝島鉱業
大正13年度	1924	林暇	福岡	三井鉱山
大正13年度	1924	洞水悟	新潟	日本石油
大正13年度	1924	河合穰	北海道	北海道炭砒汽船

番号	ラベル番号		資 料 名
223	N12	12	三菱新入炭坑第六坑調査報告書
224	N12	13	三井串木野金山西山坑調査報告書
225	N13	1	生気嶺並威鏡北道諸炭坑調査報告
226	N13	2	撫順炭硯東郷坑場調査報告
227	N13	6	足尾通洞選鉱場調査報告
228	N14	1	鯉田炭坑第一坑調査報告書
229	N14	2	久根鉱山調査報告書
230	N14	3	三井鉱山株式会社串木野鉱業所調査報告書
231	N15	1	北海道炭硯汽船株式会社万字硯相生坑調査報告書
232	N15	2	沖の山炭硯新坑調査報告書
233	N15	3	日立鉱山調査報告書
234	N17	1	北海道炭硯汽船株式会社万字硯美流渡坑調査報告書
235	N17	2	足尾銅山調査報告書
236	N17	3	三井串木野鉱業所報告書
237	N17	6	三井鉱山株式会社串木野鉱業所調査報告
238	N17	7	夕張炭硯最上坑調査報告書
239	N18	1	空知硯神威坑調査報告書
240	N18	3	三池鉱業所宮浦坑調査報告書
241	N18	4	太平洋炭硯株式会社釧路鉱業所春採坑調査報告書
242	N18	7	三井三池万田坑調査報告書
243	N18	8	鯛生金山鉱業株式会社調査報告書
244	N19	1	A 沖ノ山炭硯新坑調査報告書
245	N19	1	B 沖ノ山炭硯新坑調査報告書（附図）
246	N19	2	A 台湾金瓜石鉱山調査報告書
247	N19	2	B 台湾金瓜石鉱山調査報告書（附図）
248	N19	5	幌内硯布引坑調査報告書
249	N20		土肥金山調査報告書
250	N20	2	長崎県西彼杵郡崎戸村九州炭硯汽船株式会社崎戸硯業所調査報告
251	N21	3	日立鉱山採硯調査報告書
252	N21	8	三井三池鉱業所宮ノ浦坑調査報告書
253	N22	4	釜石鉱山調査報告書
254	N22	6	金瓜石鉱山調査報告書
255	N22	9	満洲国本溪湖煤鉄公司廟児溝鉄山調査報告書
256	N22	10	三井三池鉱業所四ツ山坑調査報告書
257	N23	1	尾小屋鉱山調査報告書
258	N23	7	高玉鉱山本山採硯調査報告書
259	N23	8	北海道炭硯汽船株式会社天龍坑調査報告書

作 成 年	(西曆)	作成者名	所在地	経営企業（鉱業権者）
大正13年度	1924	中橋佐治	福岡	三菱鉱業
大正13年度	1924	坂田勇	鹿児島	三井鉱山
大正14年度	1925	磯行三	朝鮮	—
大正14年度	1925	笠原謙一	満州	南満州鉄道
大正14年度	1925	山本鋭二	栃木	古河鉱業
大正15年度	1926	井上弘	福岡	三菱鉱業
大正15年度	1926	大西萬次郎	静岡	古河鉱業
大正15年度	1926	前田六郎	鹿児島	三井鉱山
昭和2年度	1927	大溝友吉	北海道	北海道炭砒汽船
昭和2年度	1927	庄武彦	山口	沖ノ山炭鉱
昭和2年度	1927	島宗悌作	茨城	久原鉱業
昭和4年	1929	池畑十太郎	北海道	北海道炭砒汽船
昭和4年	1929	吉田國隆	栃木	古河鉱業
昭和4年	1929	牛田包美	鹿児島	三井鉱山
昭和4年	1929	相羽忠雄	鹿児島	三井鉱山
昭和4年	1929	佐瀬榮次	北海道	北海道炭砒汽船
昭和5年度	1930	太田禮三郎	北海道	北海道炭砒汽船
昭和5年度	1930	中川一郎	福岡	三井鉱山
昭和5年度	1930	山田徳司	北海道	太平洋炭鉱
昭和5年度	1930	跡田泰輔	福岡	三井鉱山
昭和5年度	1930	安部高見	大分	鯛生金山鉱業
昭和6年度	1931	谷口榮	山口	沖ノ山炭鉱
昭和6年度	1931	谷口榮	—	—
昭和6年度	1931	新田旗一	台湾	金瓜石鉱山
昭和6年度	1931	新田旗一	—	—
昭和6年度	1931	安藤忠男	北海道	北海道炭砒汽船
昭和7年度	1932	横田貫	静岡	土肥金山
昭和7年度	1932	川岸武	長崎	九州炭砒汽船
昭和8年度	1933	西尾吉衛	茨城	日本鉱業
昭和8年度	1933	丁淑圻	福岡	三井鉱山
昭和9年度	1934	長谷川萬年	岩手	釜石鉱山
昭和9年度	1934	楊金章	台湾	日本鉱業
昭和9年度	1934	小林重蔵	満州	本溪湖煤鉄公司
昭和9年度	1934	木瀬信夫	福岡	三井鉱山
昭和10年度	1935	本川忠壽	石川	日本鉱業
昭和10年度	1935	南日秀夫	福島	日本鉱業
昭和10年度	1935	坂寄親雄	北海道	北海道炭砒汽船

番号	ラベル番号		資 料 名
260	N23	9	松尾鉱山調査報告書
261	N24	1	三菱鉱業株式会社生野鉱山調査報告書
262	N24	8	貝島炭鉱株式会社大辻炭鉱調査報告書
263	N24	14	三菱鉱業株式会社大夕張鉱業所大夕張新坑調査報告書
264	N24	15	A 三菱鉱業株式会社佐渡鉱山調査報告書 1
265	N24	15	B 三菱鉱業株式会社佐渡鉱山調査報告書 2
266	N24	17	三井鉱山株式会社砂川鉱業所第一坑調査報告
267	N24	18	三菱鉱業株式会社美唄炭坑第三坑調査報告書
268	N25	1	古河鉱業合名会社足尾鉱業所採鉱調査報告書
269	N25	2	住友大萱生金山調査報告書
270	N25	7	南満洲鉄道株式会社撫順炭龍鳳採炭所調査報告書
271	26	1	住友上歌志内砒堅坑調査報告書
272	26	3	吉乃鉱山採鉱調査報告書
273	26	10	住友北日本鉱業所国富鉱山調査報告書
274	27	4	本溪湖煤鉄公司調査報告書
275	27	7	基隆炭硯実習報告書
276	27	14	日本鉱業河津鉱山調査報告書
277	27	15	株式会社三井神岡鉱山実習報告書
278	27	23	尾平錫鉱床調査報告書
279			永松鉱山調査報告書
280	28	1	国富浮遊選鉱所調査報告書
281	28	4	北票炭硯豊吉採炭所実習報告書
282	28	6	満洲楊家杖子鉱山調査報告書
283	28	7	満洲鉱山青城子鉱業所実習報告書
284	28	9	花岡鉱山実習報告書
285	28	17	貝島炭鉱株式会社大之浦炭鉱第五硯実習報告書
286	29	1	A 日本化学株式会社佐世保鉱業所実習報告書
287	29	1	B 日本化学株式会社佐世保鉱業所実習報告書
288	29	3	② 日本亜鉛鉱業株式会社中龍鉱業所調査報告書
289	29	5	A 別子鉱山採鉱実習報告書
290	29	5	B 別子鉱山採鉱実習報告書
291	29	6	三菱鉱業株式会社細倉鉱業所調査報告書
292	30	1	明延鉱山採鉱実習報告書
293	30	3	① 樺太鉱業株式会社太平鉱業所実習報告書
294	30	3	② 樺太鉱業株式会社太平鉱業所実習報告書
295	30	4	① 東邦炭鉱株式会社鞍手鉱業所実習報告書
296	30	4	② 東邦炭鉱株式会社鞍手鉱業所実習報告書

作 成 年	(西曆)	作成者名	所在地	経営企業 (鉱業権者)
昭和10年度	1935	樋口和美	岩手	増田屋
昭和11年度	1936	板橋恒二	兵庫	三菱鉱業
昭和11年度	1936	栗田直方	福岡	貝島炭鉱
昭和11年度	1936	河村永一	北海道	三菱鉱業
昭和11年度	1936	穠山勝雄	新潟	三菱鉱業
昭和11年度	1936	穠山勝雄	—	—
昭和11年度	1936	水内三郎	北海道	三井鉱山
昭和11年度	1936	清政武夫	北海道	三菱鉱業
昭和12年度	1937	服部義雄	栃木	古河鉱業
昭和12年度	1937	奥村隆康	岩手	住友鉱業
昭和12年度	1937	吉澤正夫	満州	南満州鉄道
昭和13年度	1938	磯野三雄	北海道	住友鉱業
昭和13年度	1938	大寶蕃彌	秋田	大日本鉱業
昭和13年度	1938	三浦三郎	北海道	住友鉱業
昭和14年度	1939	本郷宏平	満州	本溪湖煤鉄公司
昭和14年度	1939	李世祿	台湾	基隆炭鉱
昭和14年度	1939	南部健三	静岡	日本鉱業
昭和14年度	1939	梅澤元次	岐阜	三井鉱山
昭和14年度	1939	山縣倫彦	大分	三菱鉱業
[昭和14年]	1939	中井裕	山形	古河鉱業
昭和15年度	1940	伊藤弘	北海道	住友鉱業
昭和15年度	1940	盧遵義	満州	満州炭硯 (満州国)
昭和15年度	1940	張曾鉞	満州	日満鉱業・満州鉱山
昭和15年度	1940	荻野泉	満州	安泰鉱業股份有限公司
昭和15年度	1940	大泉鶴義	秋田	藤田組
昭和15年度	1940	木原光	福岡	貝島炭鉱
昭和16年度	1941	帆足等	長崎	日本化学
昭和16年度	1941	帆足等	長崎	日本化学
昭和16年度	1941	藤堂良知	福井	日本重鉛鉱業
昭和16年度	1941	三井精一	愛媛	住友鉱業
昭和16年度	1941	三井精一	愛媛	住友鉱業
昭和16年度	1941	入澤三郎	宮城	三菱鉱業
昭和17年度	1942	大瀧新	兵庫	三菱鉱業
昭和17年度	1942	田中光男	樺太	樺太鉱業
昭和17年度	1942	田中光男	—	—
昭和17年度	1942	谷口次郎	福岡	東邦炭鉱
昭和17年度	1942	谷口次郎	—	—

番号	ラベル番号			資 料 名
297	30	5	①	入山炭鉱調査報告書
298	30	5	②	入山炭鉱調査報告書
299	30	6		日本精鉱株式会社中瀬鉱山実習報告書
300	30	7	①	住友鉱業歌志内鉱業所歌志内鉱実習報告書其ノ一
301	30	7	②	住友鉱業歌志内鉱業所歌志内鉱実習報告書其ノ二
302	30	8	①	鳥取県岩美鉱山調査報告書
303	30	8	②	鳥取県岩美鉱山調査報告書
304	31	2		三菱勝田鉱業所堅坑実習報告書
305	31	3	I	日鉄鉱業株式会社釜石鉱業調査報告書
306	31	3	II	日鉄鉱業株式会社釜石鉱業調査報告書
307	31	4	I	三井山野鉱業所実習報告書其ノ一
308	31	4	II	三井山野鉱業所実習報告書其ノ二
309	31	5		帝国石油株式会社秋田鉱業所調査報告書
310	31	6		三菱美唄鉱業所堅坑実習報告書
311	31	8		大土森鉱山実習報告書
312	N32	1		倶知安鉱山第三鉱床報告書
313	N32	2		北海道三井芦別実習報告書
314	N32	3		雄別鉱業所実習報告
315	N32	8		生野鉱山実習報告
316	N32	10		宇部興産株式会社沖ノ山炭鉱実習報告
317	N32	11		茂山鉱山調査報告書
318	N32	12		住友鉱業株式会社北海道赤平鉱調査報告書
319	N32	A14		三井鉱山株式会社田川鉱業所調査報告
320	N32	B14		三井田川鉱業所実習報告書
321	N32	18		日本鉱業株式会社検徳鉱山実習報告書
322				豊羽鉱山実習報告書
323				新夕張鉱実習報告書
324				三菱鉱業株式会社大夕張鉱業所調査報告書

作 成 年	(西暦)	作成者名	所在地	経営企業 (鉱業権者)
昭和17年度	1942	田中正義	福島	入山採炭
昭和17年度	1942	田中正義	—	—
昭和17年度	1942	土屋禎次	兵庫	日本精鉱
昭和17年度	1942	吉田英幸	北海道	住友鉱業
昭和17年度	1942	吉田英幸	—	—
昭和17年度	1942	富永裕	鳥取	日本鉱業
昭和17年度	1942	富永裕	—	—
昭和18年度	1943	後藤秀夫	福岡	三菱鉱業
昭和18年度	1943	杉村暁秀	岩手	日鉄鉱業
昭和18年度	1943	杉村暁秀	岩手	日鉄鉱業
昭和18年度	1943	中村横良	福岡	三井鉱山
昭和18年度	1943	中村横良	—	—
昭和18年度	1943	舟木襄	秋田	帝国石油
昭和18年度	1943	藤井久夫	北海道	三菱鉱業
昭和18年度	1943	早瀬喜太郎	宮城	倉敷鉱業
〔昭和19年〕	1944	有岡宏	北海道	日鉄鉱業
〔昭和19年〕	1944	井上大巳	北海道	三井鉱山
〔昭和19年〕	1944	笠井次郎	北海道	雄別炭砒鉄道
〔昭和19年〕	1944	杉村健三	兵庫	三菱鉱業
〔昭和19年〕	1944	銅直雅郎	山口	宇部興産
〔昭和19年〕	1944	中村一郎	朝鮮	三菱鉱業
〔昭和19年〕	1944	中津允武	北海道	住友鉱業
〔昭和19年〕	1944	古川正八	福岡	三井鉱山
〔昭和19年〕	1944	古川正八	福岡	三井鉱山
〔昭和19年〕	1944	牧野友茂	朝鮮	日本鉱業
〔昭和19年〕	1944	川口雄平	北海道	日本鉱業
〔昭和21年〕	1946	肥田五郎	北海道	北海道炭砒汽船
〔昭和23年〕	1948	織田忠旻	北海道	三菱鉱業

註

- (1) 池上重康「早稲田大学創造理工学部環境資源工学科所蔵鉦山調査報告書目録」(『エネルギー史研究』26、2011年)。
- (2) 学科別の卒業生数が把握できる1934年までで284名(『早稲田大学理工学部一覧 昭和九年度』44～45頁)、今回の移管対象に含まれる同期間の報告書の数には228名分である。ただし、選科生などによる報告書も含まれ、卒業生数と報告書の数とはそもそも一致しないとみられる。また、池上作成の目録には記載されているものの、現在、所在が確認できない報告書も数冊ある。
- (3) 松本康正「旧制早稲田大学学科編成年譜」(『早稲田大学史記要』17、1985年) 128～130頁。
- (4) 「採治会記事」(『早稲田採治会会報』2、1920年) 213頁。
- (5) 前掲『早稲田大学理工学部一覧 昭和九年度』67～73頁。
- (6) 以降、卒業期数の前に「N」を付すケースが続くが、第10期限りの別格卒業生に「N」を付して、以降も継続する学部卒業生に「O」を付した意図や、アルファベットの意味内容については、今のところ判然としない。
- (7) なお、付された名称は各大学で傾向を異にしている。目録が公になっている各帝国大学の場合、東京では「(実習) 報告」、京都では「(実習) 報文」がそれぞれ大半を占め、九州は「(実習) 報告」で一貫している。また、北海道では、当初「(実習) 報告」で統一されていたが、1930年代半ばより「(実習) 報文」が混在するようになり、1937年を境に「報文」へと切り替わるなど、変遷がみられる。
- (8) 『早稲田大学百年史』別巻Ⅱ(早稲田大学出版部、1989年) 91頁。
- (9) 前掲『早稲田大学百年史』別巻Ⅱ、91頁。
- (10) 戦争末期の1944年11月以降、同学科採鉦専攻の2、3年生が軍需省兵器総局の実施する国内資源調査に従事しており、学生がその際にまとめた報告書は、終戦と同時に破棄されたとのことである(前掲『早稲田大学百年史』別巻Ⅱ、96頁)。